

# 五右衛門と新左

国枝史郎

青空文庫



「大分世の中が静かになつたな」

こう秀吉が徳善院へ云つた。

「殿下のご威光でございます」

徳善院、ゴマを磨り出した。

「ところが俺は退屈でな」

「こまつたものでございます」

「趣向は無いか、変つた趣向は？」

「美人でもお集めになられては？」

「少々飽きたよ、実の所」

「それに淀殿がおわすので」顔色を見い見いニタリとした。

「うん淀か、可愛い奴さ」釣り込まれて秀吉もニタリとした。

後庭で鶴の声でした。

色づいた楓の病葉わくろっぱが、泉水の中へ散ったらしい。

素晴らしい上天氣の秋日和であつた。

「趣向は無いかな、変つた趣向は？」

秀吉は駄々をこね出した。

「さあ」

と云つたが徳善院、たいして可い智慧も出ないらしい。

トホンとして坐わり込んでいる。

「ほい」

と秀吉は手を拍った。「あるぞあるぞ珍趣向が！」

「ぜひお聞かせを。なんでございますな？」

「茶ノ湯をやろう、大茶ノ湯を」

「なんだつまらない、そんな事か」心の中では毒吐いたが、どうして表面は大恭悦で、ポンと額まで叩いたものである。

「いかさま近來のご趣向で」

「場所は北野、百座の茶ノ湯」

「さすがは殿下、大がかりのことで」

合槌は打ったが徳善院、腹の中では舌を出した。「へへ腹でも下さないがいい」

「ふれを廻わせ！ ふれを廻わせ！」

秀吉は例の性急であつた。

「おおども大供がわるさ悪戯をやり出したわい。さあせわ忙しいぞ忙しいぞ！」徳

善院は退出した。

×

石田治部少輔、益田右衛門尉、この二人が奉行となつた。

「さる程に兩人承て人々をえらび、茶ノ湯を心掛けたる方へぞ触れられける。大名小名是を承はり給ひてこは珍敷々々面白きご興行かな、いかにとしてか殿下様へ、お茶をば申べき、望ても叶べ

き事ならず、かゝる御意こそ有難けれど、右近の馬場の東西南北に、おのゝ屋敷割を請取て、数奇屋を立てられける」

こうその頃の文献にあるが、これはとんでもない嘘なのであつた。みんなは迷惑をしたのであつた。

「さて、和漢の珍器、古今の名匠の墨跡、家々の重宝共此時にあらずばいつを期すべきと、我もゝと底を点じて出されける」

これは何うやら本当らしい。

秀吉の御感を蒙つて、高値お買上げの榮を得ようか、お目に止まったに付け込んで、献上して知行増しを受けようかと、そういうさもしい心から、飾り立て並べたものらしい。

「さる程に時移りて、已に明日にもなりしかば、秀吉公仰せられ

けるは、一日に百座の会なれば、天あけてはいかがかとして、寅の一天よりわたらせ給ふべきよし、仰出されけり。お相伴には、玄以法印、法橋紹巴をめされける」

これも将しく其の通りであつた。

「大小名のかこひの前なる蠟燭は、たゞ万燈に異ならず、百座の会なれば、いかにも短座に見えにけり」

これにも相違は無かつたらしい。

「かくて時刻も移りければ、やうく百座成就し給ひて、還御をよびたまふ。秀吉公西をごらんありければ、すこし引き退きて萱の庵見えにけり」

「玄以玄以」と秀吉は呼んだ。「鳥渡風流だな。何者か？」



「一興ある茶湯者すきしやでございます。堺の住人とか申しますことで」

「おおそうか、寄つて見よう」

「竹柱にして、真柴垣を外に少しかこひて、土間をいかにもく美しく平ならさせ、無双の蘆屋釜を自在にかけ、雲脚をばこしらへて、茶碗水差等をば、いかにも下直なる荒焼をぞもとめける。其外何にても新きを本意とせり。我身はあらしき布かたびらを洩染にかへしたるをば着、ほそ繩を帯にして、云々」

これが庵の有様であり又亭主の風貌であつた。

亭主は土に額をつけ、かしこまって謹しんでいた。

「作意の働き面白いな。手前を見たい。一服立てろ」

秀吉は端座した。

亭主、恭しく一揖し、雲脚を立てて参らせた。

「これは、よく気が付いた。百座の茶、湯で満腹だ。かるがると香煎を出したのは、言語道断云うばかりもない。……名は何んというな、其方そちの名は？」

「無徳道人石川五右衛門。京師の浪人にございます」

「おおそうか、見覚え置く」

で、秀吉は帰館した。

×

伏見城内奥御殿。――

秀吉は飽気に取りられていた。

淀君は今にも泣き出しそうであった。

小供の秀頼は這い廻わっていた。

侍女達はウロウロまごついていた。

一体何事が起こったのであろう？

大閤殿下の衣裳の襟が小柄で縫われていたのであった。

驚き恐れるのは当然であった。衣裳の襟を縫ったのである。胸を刺そうと思つたら、胸を刺すことさえ出来たろう。或は胸を刺

そうとして、故意わざと襟を縫ったのかも知れない。

「謀反人がいる！ 謀反人がいる！」

表も裏も騒ぎ出した。

けつきよく石川五右衛門という、京師の浪人に疑がかかった。

「それ召捕れ」ということになった。

秀吉の威光で探がすことであつた。苦もなく五右衛門は召捕られた。

とりあえず長束正家が、取調役を命ぜられた。

「衣裳の襟を縫いましたは、いかにも私でございます。あまり縫いよく見えましてので。……別に他意とはございません」

これが五右衛門の申状であつた。

「あまり縫いよく見えたというか？ ふん」

と秀吉は小首をかしげた。

「その者直々俺が調べる」

秀吉は正家にこう云った。

そこで五右衛門は破格を以て秀吉の御前へ引き出された。

「俺の体に隙があつたと、こうお前は云うのだな？」

「御意の通りにございます」五右衛門は少しも臆せなかつた。

「で、どんな時、隙があつた？」

「ご退座という其の瞬間、お体が斜になられました時」

「うむ、その時隙が見えたか？」

「はい、左様でございます」

秀吉は鳥渡考えた。

「よく申した、味のある言葉だ。斜？ 斜？ 側面だな？……いや全く世の中には側面ばかり狙う奴がある。とりわけ徳川内府などはな。……どうだ五右衛門、俺に仕えぬか」

「これは何うも恐れ入ったことで」

「得手は何んだ？ お前の得手は？」

「はい、些少、伊賀流の忍術を……」

「ほほう忍術か、これは面白い。細作として使ってやろう。……これ、此の者に屋敷を取らせろ」

こんな塩梅に五右衛門は、ズルズルと秀吉の家来になった。

×

「居るかえ」

と云い乍ら這入つて来たのは、お伽衆の曾呂利新左衛門であつた。

「やあ新左、まず這入れ」

五右衛門はポンポンと座を払つた。

二人は非常な親友なのであつた。

その対照が面白い。

新左衛門は好男子、水の垂れるような美男であつた。

それに反して五右衛門は、忍術家だけに矮身で、猪首の皺だら

けの醜男であつた。

新左衛門は町人出、これに反して五右衛門は、北面の武士の後胤であつた。

一人は陽気なお伽衆、然るに、一方は陰険な細作係といふのであつた。

が、二人には一致点もあつた。

「世の中が莫迦に見えて仕方が無い」——と云うのが即ち夫れであつた。

そうして夫れが二人の者を、ひどく仲宜くさせたのであつた。

「五右衛門」

と新左はニヤニヤしながら「俺は滅法儲けたぜ」



「お前のことだ、儲けもしようさ」五右衛門は茶釜を引き寄せた。

「まあ聞くがいい、耳を嗅いだのさ」

「え、なんだつて、耳を嗅いだ？ なぜそんなことをしたんだい？」五右衛門も是れには驚いたらしい。

「手段だよ、手段だよ、金儲けのな」

## 三

「で、誰の耳を嗅いだんだ？」

「殿下の耳を、云う迄もねえ」

「へえ、それで金儲けか？」

「加藤、黒田、浅野、生駒、そいつらの顔を睨め乍ら、殿下の耳を嗅いだやつさ。すると早速賄賂が来た。告口されたと思つたらしい。尤もそいつが付目なのだが」

「アツハハハ成程な。お前らしい遣口だ。人生ひとのよの機微も窺われる。……それはそうとオイ新左、お前この釜に見覚えはないか？」

「どれ」

と云つて見遣つたが「アツこいつア榎柴だ！」

「殿下ご秘蔵の榎柴よ」

「どうしてお前持つてるのだ？」新左衛門は仰天した。

「どうするものか、借りて来たのさ。無断拝借というやつよ」

「それじゃお前、泥棒じゃアないか」

「なぜ悪い、可いじゃないか。どうせ無駄に遊んでいる釜だ。二、三日借りて立ててから、こつそり返えしたら、わかりっこはない」

「そんな勝手が出来るものかな」新左衛門は感心した。「つまり何んだ、忍術だな。……忍術って本当に可いものだな」

「そうさ、お前の頓智ぐらいな」

「なんだ、莫迦な、面白くもねえ」厭な顔をしたものである。

「おい五右衛門」と新左衛門は云った。「秘伝は何んだ、忍術の秘伝は？ 思うに隙を狙うのだろうか？」

「隙を狙うには相違無いさ。が、尋常の隙では無い。……用心から洩れる隙なのだ。固めから崩れる隙なのだ。開けっ放しの人間には、仲々忍術は応用出来ない」

「ははあ然うか、これは驚いた。頓智のコツとそっくりだ。……

頓智とは弱点を突くことさ。用心堅固の奴に限って沢山弱点を持つている。その弱点をギシと握り、チヨイチヨイ周囲まわりをつつ突くのさ。……まともにも突くと皮肉になる。皮肉になると叱られる。そこで軽くつつ突くのさ。……そうだ或る時こんなことがあつた。

『余の顔は猿に似ているそうだ。どうだ、ほんとかな、似ているかな?』こんなことを殿下が仰せられた。列座の面々一言も無い。こいつア何うにも答えられない筈さ。事実猿には似ているのだが、相手が殿下だ、そうは云えない。で、いつ迄も無言の行よ。そこで俺が云つたものさ。『いえいえ然うではございません。つまり猿の顔なるものが、殿下に似ているのでございます』とな。する

と大将大喜びだ。早速拝領と来たものさ。アツハハハこの呼吸だよ」

「いや面白い、そうなくてはならない」五右衛門は感心したらしい。

釜の湯がシンシンと音を立てた。

早咲の桜がサラサラと散った。

どこかで鶯の声がした。

将に閑室余暇ありであった。

×

「お前は飛行出来るかな？」

或る時秀吉が五右衛門に訊いた。

「自由自在でございます」

これが五右衛門の返辞であつた。

「俺を連れて飛べるかな？」

「いと易いことでございます」

「都は祇園会で賑わっているそうだ。ひとつ其そいつ奴を見せてくれ」

「かしこまりましたございます」

五右衛門はこう云うと懐中から、鳶の羽根を取り出した。

「いざお召し下さいますよう」

それから後の光景は、こう古文書に記されてある。

「……雲の原へとぞ上りける。遙の下を見給へば、蒼海まんくとして、魂をひやせり。我にもあらぬ心地にて、なにと成りゆくやらんと覺しにける。かくて尽きぬとおもう時に、目をおきて見給へば、ほどなく大山に立りける杉の上にぞ落着ける。殿下こゝはいづくの国、いかなる所ぞと宣まへば、是こそ都の西山、愛宕山と申処にて候、祇園会もいまだ始まらず候間、いま暫爰（こゝ）におはしまして、ご休息有べし、さりながら、何にても食事の望に候はんまゝ、是にしばしまたせ給へ、とゝのへてきたり候はんとて、つる立ちけるとおもへば、くれに見えざりけり。とかくする中に、五右衛門はや歸りて、いぎ／＼殿下まゐり候へとて、いかにもきらびやかなる器物に、好味をつくしける美膳をぞすへにける。

殿下御覽じて、これは早速にとゝのふものかなとて、かたのごとく食したまひける。そのうち珍酒を振舞候はんとて、とり／＼の名酒あまたよせて、すゝめにける。とかくして時も移る程に、はや祇園会も初まる時分に候、いざ／＼御供仕らんとて、又件の鳶の羽に打乗て、虚空をさして飛けるが、刹那がうちに、祇園の廊門のうへにぞ落着ける、まこと神事の最中なれば、都鄙の貴賤上下、東西南北は充満して、人のたちこむこと家々に限りなくぞ見えにけり。五右衛門申されけるは、むかふへ来る武士どもを見給へ、身長に及ぶ大太刀をさして、張肘にて、大路せばしと多勢ありく事の面憎さよ、殿下もつれ／＼におはしまさんに、ちと喧嘩をさせて、賑にひらめかせ、見物せんとて、棟の上へ生ひ



たる苔を、すこしづつ摘み、ばり／＼と投げれば、御辺は卒爾を、人にしかけるものかなといふ中に、又飛礫を雨のごとくに打ければ、総見物ども入乱て、このうちに馬鹿者こそ有遁すまじとて、太刀かたな引ぬきて、爰に一村かしこひに一むすび、五人三人づつ渡しあひて、しのぎを削り、うち物よりも火焰を出す。女童是を見て、四方へばつと逃まどふ。あれ／＼殿下御覽ぜよ。なによりも面白き慰にて候はぬかと云ひければ、殿下のたまひけるは、さのみは人を苦めて、罪造りて何かせん、はや／＼やめ候へと宣へば、さあらば喧嘩をやむべしとて、西の方を二三度まねきければ、見物の人々も、喧嘩をいたす輩も、八方へむら／＼とぞ逃たりけり。かくて時刻も移りて、祇園会の山鉦、はやしたて、

渡しけり。五右衛門こゝは、所間遠にて、おもしろからず、よき所にて見せ参らせ候はんとて、四条の町の華麗なる家にともなひけり。さて何処よりとりて来たりけん。杉重角折、すはまの台など、あまた殿下にすゝめけり。かくて山鉾もこと／＼く通り過ければ、今は見るべきものゝ無ければ、いざ／＼故郷へ帰らんとて、また鳶の羽にうちのせて、其日の六つはじめに、伏見にぞ帰りける。帰館して後にぞ、殿下は夢のさめたる心地はしつれとぞ、宣ひけると語り給へば、五右衛門首尾を施ける」

## 四

だが此の事あつて以来、秀吉は五右衛門をうとうとしくした。

「恐ろしい奴だ」と思ったからであつた。

自然それが五右衛門にも解り、五右衛門も秀吉を疎むようになつた。

とうとう  
遂々或る日瓢然と、伏見の城を立ち去つた。

せつとう  
剽盗に成つたのは夫れからである。

五右衛門が伏見から去つたのを、誰にもまして失望したのは、親友の曾呂利新左衛門であつた。

彼は快々として楽しまなかつた。

「面白くないな、全く面白くない。殿下も腹が小さ過ぎる。五右衛門ぐらいを使え無いとは。……俺もお暇しようかしら。考えて

見れば俺なんてものは、体のいい貴頭の幫間というものだ。男子生れて幫間となる！ どうも威張れた義理じや無い」

こういう考えが浮かんで以来、<sup>から</sup>軽妙な頓智が出なくなった。

「俺は決して幫間では無い。俺はこれでも諷刺家なのだ。世の所謂成上者が、金力と権力を真向にかざし、我儘三昧をやらかすのを、俺は俺の舌の先で、嘲弄し揶揄するのだ。例えば或る時こんなことがあった。そうだ聚楽第の落成した時だ、饗応の砌、忌言葉として、火という言葉云わぬよう、殿下からの命令だった。俺は考えた。言葉を忌んで何んになる。油断から火事は起こるのだ。言葉から火事は起こりはしない。土台俺には此の聚楽が、不愉快に見えて仕方が無い。構うものか逆手を使って、あべこべ

に殿下をとつちめてやれ、で、俺は殿下へ云つた。『殿下、私には槻けやき細工の、見事の釜がございます』『槻の釜だと、馬鹿を云え。火に掛けたら燃えるだろうに』『殿下、罰金でございます！ 忌言葉を有仰つたではございせんか』『おつ成程、火と云つたな』『それぞれ二度迄申されました』——で、俺は罰金を取り、京大  
阪伏見の住民へ、米を施してやったものだ。……俺は断じて幫間  
では無い。俺は俺の舌三寸で、成上者の我儘を、抑え付けている  
警世家だ！ と実は今日まで信じて来たのだが、どうも今では其  
の自信が土台下から崩れて来た。一体全体俺の頓智が、どの位の  
世の為めになつてるか？ これが第一疑わしい。せいぜい殿下の  
臍繰を攫つて、施米するぐらいがオチでは無いか。そうして殿下

の我儘は、そのため毫も抑えられはしない。次に俺に就いて考え  
て見るに、警世家で候、諷刺家で候と、よく口癖には云うけれど、  
態度たるや然うでは無い。軽口頓智を申上げ、それで殿下がお笑  
いになれば、唯無性と嬉しくなる。こういう心持は何う弁解して  
も、傭人の卑窟心だ。操っている操っていると思ひ乍ら、いつか  
人形に操られている、可哀そうな馬鹿な人形師！ どうやら其奴  
が俺らしい。成程なあ、こうなつて見れば、浪人した五右衛門は  
利口だわえ」

彼は怏々として楽しまなかつた。

剽盜になつてからの五右衛門は、文字通り自由の人間であつた。本能によつて振舞つた。

快不快によつて振舞つた。

所謂徹底した功利主義者として、天空海濶に振舞つた。

「その結果が愉快でさえあれば、動機なんか何うだつて構うものか」

これが五右衛門の心持であつた。

だが、賊としての五右衛門の、その凶悪の事蹟に就いては、既に大分の読者諸君は、講談乃至は草双紙によつて、先刻承知のことと思う。で、詳しくは語るまい。

関白秀次に仕えたのは、秀次の執事木村常陸介と、同門の誼よしみがあつたからであつた。

「おい、仕えろ」「うん、よかろう」

こんな塩梅に簡単に、常陸介の周旋で、五右衛門は秀次へ仕えたのであつた。

当時秀次は聚楽第にいて、日夜淫酒に耽つていた。

「天下はどうせ秀頼のものだ。俺は廢嫡されるだろう。どうも浮世が面白くない。面白くない浮世なら、面白くしたら可いじゃ無いか」

で、淫酒に耽るのであつた。

快樂主義者の五右衛門に執つては、秀次は格好な主君であつた。



素敵に愉快な日がつづいた。

或る時常陸がこんなことを云った。

「五右衛門、一働き働いてくれ」

「よかろう、何んでも云い付けるがいい」

「伏見の城へ忍んでくれ」

「……………」

さすがに五右衛門も黙って了った。

よく其の意味がわかったのであつた。「ははあ常陸奴この俺を、

刺客にしようというのだな」

ややありて五右衛門は「諾<sup>うん</sup>」と云った。「俺はいつぞや秀吉の

襟へ、小柄を縫い付けたことがある。つまり、なんだ、その小柄

を、今度は深目に刺すばかりだ」

×

五右衛門が秀次に仕えたと聞くと、ひどく秀吉は恐怖した。

そこで諸国へ令を出し、名譽の忍術家を召し寄せた。

その中から十人を選抜し、「忍術しのび十人衆」と命名し、大奥の警護に宛てることにした。

一条弥平、一色鬼童、これは琢磨流の忍術家であつた。

莫座小次郎、伊賀三郎、黄楊つげ四郎の三人は、甲賀流忍術の達人であつた。

敷島松兵衛、運運八、この二人は八擒流であつた。

小笠原民部は民部流開祖で、十人衆の頭であつた。

<sup>むらじ</sup>連武彦、霧小文吾、これは霧派の忍術家であつた。

由来忍術というものは、武芸十八般のその中には、這入ることの出来ないものであつた。外道を以つて目されていた。何時の時代に始まったものか、それもハッキリとは解っていない。日本神代史を調べて見ると、神々はすべて忍術家であつて、国土を産んだり火焰を産んだり、海を干したり山を移したり、死の国へ平氣で行つたりしている。

忍術が所謂「術」として、日本の芸界へ現われたのは、藤原時代だということである。

戦国時代に至っては、尤も軍陣に用いられた。特に信玄が重用した、「蜈蚣衆」と称された物見武士は、大方優秀なる忍術家であつた。

信長は夫れほど重用せず、秀吉も重用しなかつた、家康に至つて稍用いたが、併し次第に衰微した。

化学、物理、変装術、早走り、度胸、小太刀使い、機械体操式、軽身術、機智の七種を学ぶことによつて、大体その道に達するところが出来た。

彼等の日常の携帯品といへば、鍔無柄巻の小刀一本（一尺足らずのものである。）金属製の小唧筒ほんぷ（これで硫酸や硝酸を、敵の面部へ注ぎかけた。）精巧無比の発火用具（燧石の類である。）

折畳式の鉄梯子、捕縄、龕燈、各種の楽器（これで或る時は虫の音を聞かせ、又或る時には鳥の音をきかせ、その他川の音風の音、蛙の音などを聞かせたものである。）そうして些<sup>いささか</sup>少<sup>さか</sup>の催眠剤など。……

そうして詳細の地図を持ち、目欲しい城の縄張絵図、こういうものを持っていた。

「平法術」も必要であつた。（即ち平日喧嘩の場合に、特に用いる術として、伊藤伴右衛門高豊が、編み出した所の武術である。）立合抜打と称された「抜刀術」も必要であつた。

「小具足腰の廻わり」も必要であり「捕手」「柔術<sup>やわら</sup>」も大切であつた。「強法術」は更に大事、「手裏剣」の術も要ありとされた。

「八方分身須臾転化」これが忍術家の標語であつた。「居附」ということを酷く嫌つた。

「欲在前忽然而在後」これでなければならなかつた。

「澄む月は一つなれども更科や田毎の月は見る人のまま」  
こうでなければならぬのであつた。

## 六

或る夜秀吉はお伽衆を集め、天狗俳諧をやつていた。

刀売おどろいて見し刃傷沙汰

木魚打つ南無阿弥陀仏新左殿

南無三宝夜はふけまさる浪士なり

京つくし野を馬曳きて吠える犬

天が下はるばるかかる鯨売

蚊遣立って静かに伝ふ闇夜かな

蚊柱の物狂ふなり伏見城

京伏見経机ありあはれなり

辻斬の細きもとでや念仏僧

鬼瓦長し短し具足櫃

忍術の袈裟かぶり行くほととぎす

こんな名吟が続出した。

で、みんなドツと笑い、ひどく陽気で可い気持であった。

で、秀吉が不図見ると、細川幽齋と新左衛門との間に、見慣れない人間が坐わっていた。

黒小袖を着、黒頭巾を冠り、伊賀袴を穿き、草鞋をつけた、身真黒の人間であつた。いつ来たものとも解らなかつた。誰一人気が付いた者がなかつた。

ギョツとして秀吉は声をかけた。

「貴様は誰だ！ 何者だ！」

すると其の男は一礼したが、

「小笠原民部でございます」

それは「忍術十人衆」の、小笠原民部一念齋であつた。「おお民部か、これはこれは」苦笑せざるを得なかつた。



「何時何処から這入つて来たな？ いやいやお前は忍術しのびの達人、これは訊くだけ野暮かもしれぬ。……で、何か用事かな？」

「今夜、先刻より、石川五右衛門、忍び込みましてございます」  
これを聞くと一座の者は、颯とばかりに顔色を変えた。

「うむ、そうか、縛からめ取れ！」

秀吉は烈しく命令した。

「只今苦戦中でございます」

「ナニ苦戦？ なんのことだ？」

「我等十人十方に分れ、嚴重に固めて居りますものの、五右衛門は本邦無雙の術者、ジリジリ攻め込んで参ります」

「うむ」と秀吉は渋面を作った。

「そこで御注意致し度く、参上致しましてございます。……如何様な不思議がございまして、決してお声を立てませぬよう」

「声を上げては不可ないのか？」

「決して決してなりません。誰人様にも申し上げます。決してお声を立てませぬよう。おお夫れから最う一つ、是非とも何か一つの事を、熱心にお考え下さいますよう。他へお心を移しませぬよう。……では、ごめん下さいますよう」

襖を開けると退出した。

後は一座寂然しんとなった。

×

併し私は忍術に就いては深い研究をしていない。で、五右衛門と十人衆とが、どんな塩梅に戦ったものか、どうも遺憾乍ら記すことが出来ない。いずれ素晴らしい術比べが、闇中で行われたことだろう。

とまれ其の結果、伏見城方では、十人の人間が殺された。そうして大閤秀吉は、曾呂利新左衛門の頓智によつて、あやうく命を助かった。

小笠原民部一人を抜かし、後の九人の忍術家達は、二時間ばかりの其の間に、五右衛門の精妙な法術のため、屈折されて了つたのであつた。そこで五右衛門は城中大奥、秀吉の居る隣室まで、

堂々と入り込んで来たそうである。

忽然その時秀吉の耳へ小供の泣声が聞えて来た。火の付いたよ  
うな泣声であつた。しかも秀頼の声であつた。

「や、若が泣いている」

ハツと思つた一刹那、秀吉の体はズルズルと、一尺ばかり前へ  
出た。何者かの力が引き出したのであつた。「うむ、しまった！」  
と気が付くと共に、小供の泣声がハタと止んだ。

陰々滅々静かであつた。

と、呼ぶ声が聞えて来た。

「殿下！ 殿下！ 在しませぬかな！」

「応」と我知らず答えようとした途端、

「……世に盜賊の種は尽きまじ」と、曾呂利新左衛門が大声で呼んだ。「五右衛門、上の句を付けてくれ！」

すると隣室から笑う声がした。

「うむ、新左か、新左がいたのか！ アツハハハ、そうであつたか。……石川や浜の真砂は尽くるとも。……沙阿弥！ 沙阿弥！

沙阿弥はいぬか！」

お坊主沙阿弥は迂濶りと、「へーい」と大きな返辞をした。と、スルスルと沙阿弥の体は、隣の部屋まで引き出されて行つた。

が、その後は何事も無かつた。沙阿弥の死骸はその翌日、泉水の畔で見出された。

## 七

秀吉暗殺の壮図破れ、面目を失つた五右衛門は、秀次の許を浪人！ ふたたび剽盜の群へ這入つた。

秀次が高野山で自尽した後、しばらくあつて五右衛門も、新左衛門の手で捕えられた。

千鳥の香爐の啼音に驚き、仙石権兵衛の足を踏み、法術破れて捕えられたのでは無い。

瓜一つのために捕えられたのであつた。

京師警備の任にあつた、徳善院前田玄以法師が、或る日数人の従者を連れ、大原野を散歩した。その中には曾呂利新左衛門もい

た。

それは中夏三伏の頃で、熱い日光がさしていた。

と、一つの辻堂があつた。縁下から二本の人間の足が、ヌツと外へ食み出していた。そうして其の側に一つの瓜が、二つに割られて置いてあつた。

一行はそのまま通り過ぎようとした。

機智縦横の新左衛門だけが、それに不審の眼を止めた。

「徳善院様徳善院様」

彼はそつと囁いた。「誰か人が寝て居ります」

「附近の百姓が労働に疲労つかれ、辻堂で昼寝をしているのさ」徳善院は事も無げに云つた。

「足をごらんなさりませ」

「人間の足だ、異つたこともない」

「白くて滑らかで細うございます。百姓の足ではございません」

「そう云えば百姓の足では無いな」

「瓜が傍に置いてあります」

「さようさ、瓜が置いてあるな」

「蠅が真黒にたかつて居ります」

「蠅や虻がたかっている」

「あれは賊でございます」新左衛門は自信を以つて云つた。

「夜働きに疲労れた盗賊が、瓜の二つ割で毒虫を避け、昼寝をしているのでございます」



「うん、成程、そうかも知れない。それ者共召捕つて了え！」  
素晴らしい格闘が行われ、その結果賊は捕縛された。  
それが石川五右衛門であつた。



# 青空文庫情報

底本：「蔦葛木曾棧」桃源社

1971（昭和46）年12月20日発行

初出：「大衆文芸 第一巻第一号」

1926（大正15）年1月号

※「※」#「封／帛」、第4水準2-8-92」と「幫」との混在は  
底本通りになりました。

入力：伊藤時也

校正：伊藤時也、小林繁雄

2007年4月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 五右衛門と新左

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>